

2024年1月7日、中山競馬場で1頭の3歳牝馬がデビューを果たした。名前をオーサムピクチャという。美浦トレーニングセンターの古賀慎明厩舎に所属する。

3歳新馬戦は17頭立て、芝2000mを舞台に行われた。内田博幸騎手に導かれたオーサムピクチャは4枠8番からスタートした。序盤は後方を進み、最後の直線ではしぶとい粘り腰を見せ、9着になった。410kgという小さな体を必死に動かした。14番人気という低評価だったので、勝ち馬から1秒6差の9着は前評判以上の成績だったといっていい。

オーサムピクチャは2021年4月19日、千代田牧場で生を享けた。父キズナ、母プレイスネイチャ、母の父キングカメハメハという血統だ。千代田牧場が誇る名牝系に属するこの系統が一度は途切れそうになつた。だが関係者の懸命の頑張りがオーサムピクチャをこの世に送り出した。切掛けた細い糸は辛うじて後世につながった。今回はオーサムピクチャの母プレイスネイチャの物語に焦点を当てる。

今をさかのぼること7年前、千代田牧場のG I 牝馬ホエールキャプチャがキングカメハメハとの間に鹿毛の牝馬を出産した。2017年4月25日夕方に生まれた、「ホエールキャプチャの2017」は生まれて30分もすると、しっかりと立ち上がり、見た目には元気そうな姿を見せた。ところが誕生の喜びが長く続くことはなかった。

夜になって、飲んだ乳が鼻から漏れてくるという症状が見られた。翌日には誤嚥性肺炎の兆候も見られたため、クリニックで診察を受けることになった。診断の結果は「先天性食道狭窄症」。食道の一部が狭くなり、飲み込んだものが詰まってしまうという病気だった。ヒトにも同様の疾病が見られ、2万5千人から5万人に一人という珍しい病気だという。診断した獣医師も初めて接する疾患だった。悪いことに、先天性食道狭窄のほかに、食道の蠕動運動がうまくいかないという症状も重なった。症例が少ないため、確立した治療法もない。生存できる可能性はきわめて低いと見られていた。

牧場を挙げてのケアが始まった。クリニックに依頼して経鼻カテーテルを装着。誤嚥性肺炎のリスクを少しでも低減するため、カテーテルを通じての栄養補給

プレイスネイチャ

1985 牡 父ハードツーピート 母チヨダマサコ
2017 牝 父キングカメハメハ 母ホエールキャプチャ

が行われた。牧場のスタッフはこの作業を数時間おきに繰り返し行ったという。補液や乳以外のものを口にしないよう、お手製の口カゴで子馬の口を覆った。「この命を助けよう」。スタッフたちの気持ちはひとつになっていた。

しかし、いつまでもこうしたケアができるわけもない。2週間後の再診で予後は極めて厳しいと診断され、カテーテルは外された。あとは自力で生きていくことを願うしかなかった。

ホエールキャプチャには母親役と同時に繁殖牝馬としての仕事もあった。持病のある娘の世話にかかりきりになると、交配など翌年の出産のための準備に支障をきたす。そこで「育ての親」をつけることになった。

ふつうサラブレッドとは別の品種を乳母にする。サラブレッドと違い、性格が穏やかで実子でなくても受け入れる。サラブレッドを乳母にする場合、手間も時間もかかる。しかし、この時はサラブレッドであるスレンダーガールが乳母になった。父アフリート、母は名牝のピクトリアクラウンという血統のスレンダーガールはこの年19歳。それまでに9頭の馬を出産したベテラン繁殖牝馬だった。当歳の子馬は出産後すぐに亡くなっていた。

乳母と新生子馬のマッチングはすぐにうまくいくわけではない。時間をかけ、さまざまな工夫をこらして、スレンダーガールとホエールキャプチャの娘の関係を近づけていった。努力の結果、乳母と娘の2頭は一緒に放牧地を駆け回るようになった。4ヶ月もすると、仲のいい同期の2頭と連れ立って放牧できるまでになり、消化がいいように作られた特別食を口にして成長した。時折、特別食が飲み込みにくく、咳き込むようなこともあったが、そのうち、食べ物がのどに詰まるとき、牧柵に首を押し付けて、その詰まりを取り除く様子がみられるようになった。知らぬ間に身に着けた生活の知恵だった。秋には離乳することができた。

1歳になったホエールキャプチャの娘に馬名が与えられた。「プレイスネイチャ」。その馬名には、根性をたたえる、という意味が込められていた。かつて千代田牧場出身の競走馬にプレイスネイチャという同名の

馬がいた。1985年生まれの「初代」プレイスネイチャは幼いころに腰骨を折る大けがを負った。競走馬になれる可能性は低いといわれたが、慢性的な跛行を背負いながら、デビューにこぎつけた。その名付け親で馬主になったのは飯田正剛社長の母・政子さんだ。飯田社長は辞書を引きながら馬名を考えていた母の姿覚えている。

1988年2月、東京競馬場の芝1800mで行われた新馬戦に出走した初代プレイスネイチャは11頭立ての2番人気という支持を受けた。岡部幸雄騎手が手綱を取ったプレイスネイチャは本命馬の直後の4番手でレースを進めた。最後の直線はその2頭のマッチレースになった。最後はクビ差でプレイスネイチャの勝利。3着馬は2頭から5馬身も離されていた。火の出るようなマッチレース。まさに根性で手にしたデビュー勝ちだった。

プレイスネイチャはその後、2着、3着など上位に食い込むのだが、結局2勝目を挙げることはできず、現役を引退した。父は仮ダービー馬ハードツーピート、母はチヨダマサコ。兄は天皇賞・秋、マイルチャンピオンシップ、安田記念を制したニッポーテイオー、姉はエリザベス女王杯優勝のタレンティドガールという良血が認められ、種牡馬となった。

腰骨の骨折を克服した初代プレイスネイチャ同様、二代目のプレイスネイチャにも先天性疾患に負けないで育ってほしいと願う気持ちが込められた。

そして2021年4月19日、キズナとの間に牝馬を出産した。のちのオーサムピクチャである。授乳に必要な栄養を十分に摂れないプレイスネイチャに代わって、オーサムピクチャも乳母で育った。結果として、プレイスネイチャは1年限りで繁殖生活を引退した。

プレイスネイチャを語る上で、タレンティドガールは絶対に外せない大きな存在だ。初代プレイスネイチャの姉である。その名の通り才能豊かな牝馬で、美浦の栗田博憲調教師に育てられた。彼女の会心のレースが1987年のエリザベス女王杯（当時は3歳牝馬限定・芝2400m）である。牝馬三冠のかかるマックスビューティを外から並ぶ間もなくかわし、ゴールでは2馬身差をつける完璧な勝利だった。

繁殖牝馬となったタレンティドガールは1991年1月、同じ千代田牧場の牝馬とともに英国に渡った。交配相手に選ばれたのは供用2年目のナッシュワンである。ナッシュワンは1989年の英2000ギニー、英ダービーなどG I 4連勝を含む7戦6勝の成績を残した名馬だ。1992年1月に英国で出産した牝馬がエミネットガールで

ある。

エミネットガールは中央競馬2戦で繁殖生活に入った。2001年にサンデーサイレンスとの間にできた5番子が牝馬のグローバルピースだった。中央競馬で5戦1勝の成績を残し、クロフネとの間に2008年に送り出したのがホエールキャプチャである。ホエールキャプチャは30戦7勝。ヴィクトリアマイル、クイーンC、ローズS、府中牝馬S、東京新聞杯とG I を含む5つの重賞勝ちを収めた。そのホエールキャプチャがプレイスネイチャを産み、オーサムピクチャにつながるというわけだ。

改めて振り返れば、起点はミスオーハヤブサという牝馬になる。1973年に当時まだ千葉県にあった千代田牧場で生まれた。そのミスオーハヤブサを振り出しにチヨダマサコ、タレンティドガール、エミネットガール、グローバルピース、ホエールキャプチャ、プレイスネイチャ、そしてオーサムピクチャと血統は引き継がれてきた。一流種牡馬を求めてタレンティドガールを英国に送るなど、その牝系を大切に育て、さらに磨き上げていく手法は、50年という歳月をかけて今も受け継がれている。

千代田牧場の飯田正剛社長は「プレイスネイチャ（2代目）を助けようというスタッフの情熱と精神力には本当に頭が下がる。感謝です」と話した。プレイスネイチャを生めたころ診てきた獣医師は、飯田社長への年賀状に「飯田さんには（馬の命を）あきらめではいけないということを教えてもらいました」と書き送ってきたという。

ホエールキャプチャにはプレイスネイチャのほかにも牝馬の産駒がいるが、プレイスネイチャがただ1頭残したオーサムピクチャも、千代田牧場が誇る名牝系の1頭として、これから競走生活を送り、いずれは牧場に帰って、これまでの歴史を引き継いでいく存在になるはずだ。

オーサムピクチャの父はキズナ。プレイスネイチャを生かしたい、と同じ目標に向かって一丸となったスタッフの「絆」がプレイスネイチャの奇跡を起こしたのかもしれない。



有吉正徳（ありよし・まさのり）1957年1月、福岡県出身。1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスター・シービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬を取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー～競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊「有吉正徳の競馬ウイークリー」は連載20年。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。